台湾で初公開された美術工芸資料館収蔵資料

美術工芸資料館　館長　並木　誠士

美術工芸資料館が事務局をつとめる「京都・大学ミュージアム連携」の初の海外展覧会が、２０１８年12月15日から国立台北教育大学北師美術館（台湾）で開催された（２０１９年２月24日まで）。連携に加盟する13大学ミュージアム（今回、大谷大学博物館は出品せず）が所蔵する資料から２１２点を選んで展示した展覧会で、美術工芸資料館からもポスターをはじめとする54点を出品した。

京都・大学ミュージアム連携では、２０１１年度の結成以来、京都（２０１２年度）、博多（２０１３年度）、多賀城（２０１４年度）、那覇（２０１５年度）、京都（２０１６年度）と合同展覧会を開催し、各地の大学ミュージアムと交流してきた。その過程で、海外との交流も模索してきたが、それを受け止めてくださったのが、国立台北教育大学の林曼麗先生だった。故宮博物院の院長もつとめた林先生は、台湾の文化部、教育部などに働きかけて、展覧会受け入れのために尽力してくださった。京都側でも、京都府・京都市・京都商工会議所、京都信用金庫などに協賛金のお願いにまわり、なんとか実現することができた。なかでも、明治期の高等教育におおくの教材を提供した島津製作所からは大きな支援をいただくことができた。

今回の展覧会は、京都からの発信ということで京都の歴史や文化を示す資料類、大学ミュージアムならではの資料として教材・生徒作品・教師作品など、そして、京都の各大学に所蔵される台湾関係の資料類という三つのコーナーからなる。

美術工芸資料館からは、京都文化の発信として、京都で制作された鍔や櫛などの工芸品類や京都関係のポスター、着物や紅板締めの道具を、大学の教育・研究を示す資料として、京都高等工芸学校初期の教員が教材として購入したヨーロッパのポスターや生徒による課題作品を、そして、台湾に関連する資料として、やはり開学当初に購入された台湾原住民の衣装や土器、「台湾風情」と題されたガラススライドを出品した。いずれも、台湾では初公開の作品ばかりであるが、昔の大学の教室や研究室をイメージした北師美術館の展示室のなかで、他の大学ミュージアムの作品と並んで、台湾の人びとの目を楽しませていた。

美術工芸資料館の収蔵品のなかでもポスターは、質・量ともに充実している。今回は、初期の図案教育の教材となったジュール・シェレのポスターを展示した。また、昭和３年に京都で開催された大礼記念京都大博覧会のポスターは、京都のまちをモティーフにした明るい色調の祝祭感にあふれる画面で、展覧会に華やかさを添えていた。工芸品のなかでは、細やかな趣向を凝らした鍔のデザインに注目が集まった。武具とは思えない文学性や装飾性がデザイン資料として学生の教育に役立っていたことが興味を引いたようだ。また、開校当初の実習で生徒が作成した課題作品は、その優れた描写力とともに、写生からデザインが生まれる過程を示したもので、教育方法がわかるという点で今回の企画にふさわしい作品であった。

美術工芸資料館には、５万点を超える資料・作品が収蔵されているが、そのなかに、台湾関係の資料が多く保存されていることは、これまでほとんど知られていなかった。美術工芸資料館に収蔵されている台湾関係の資料は、いずれも開学当初には図案科の標本として登録されているもので、日本統治時代の台湾で収集された資料を図案資料として購入した可能性がある。実際に、今回展示をした衣装や模型の舟、土器には独特の文様がほどこされており、それが当時の生徒たちに図案の例として示されたと考えることができる。いまでは台湾国内にも珍しい資料がおおく、この里帰りを期に新たな研究交流が進むことが期待できる。

今回の台湾展の準備作業のなかで明らかになったこれらの資料は、京都高等工芸学校の図案教育が多様な資料をもとに展開されていたことを示している。開校初期の教員たちがヨーロッパのアール・ヌーヴォーを中心にデザイン教育をおこなってきたことは間違いないが、彼らにはそれだけではない視野の広さが備わっていたと考えてよいだろう。

本学収蔵資料ではないが、京都大学、京都教育大学に所蔵されている島津製作所がてがけたおおくの教材としての模型類は、台湾大学や会場校である台北教育大学にも同様のものが収蔵されていた。19世紀末から20世紀初頭にかけての高等教育において日本と台湾の両地で島津製作所の模型が重要な役割を果たしたことがわかり、大変興味深かった。これまで展示することのなかったこのような資料を公開できたのも、大学ミュージアムの特性をいかした企画の成果である。

複数の大学ミュージアムが共同で海外展を実施することは、もちろん日本ではじめてである。京都・大学ミュージアム連携の活動は台湾でも注目されており、これを契機に台湾国内でも大学ミュージアムの連携を模索する動きも生まれている。会期中には、京都外国語大学、京都大学の学生・大学院生によるワークショップも企画されている。その成果は、本年９月に京都で開催されるＩＣＯＭ（国際博物館会議）世界大会でも発表する予定である。今回の展覧会が、日本と台湾とのあらたな交流の第一歩であると同時に、大学や大学ミュージアムにかかわる学生や若い研究者のこれからの交流の出発点となることを期待する。

図１
「京都好博學」展看板

図２
上　美術工芸資料館所蔵のポスターと鞍・鐙
（ポスターの向こうには、京都教育大学、京都市立芸術大学の作品が並ぶ）
下　美術工芸資料館所蔵の台湾関係資料
（京都大学総合博物館の収蔵品と並んで展示されている）

図３
美術工芸資料館所蔵の台湾関係資料
（解説する台湾成功大学郭教授）